

A-LAB Exhibition Vol.38 「A-LAB Artist Gate'23」 講評

A-LABアドバイザーによる推薦に加え、初めて公募を取り入れ、A-LABアドバイザー選考会を経て出展アーティストを決定しました。以下、各アドバイザーによる講評です。

おかけんた氏（お笑い芸人・タレント、アートプランナー）

♪ええ～卒展♪でのワクワク感が止まらない！私が大学内で、『A-LAB Artist Gate 2023』に参加していただけませんか？とお願いすると、即座に「はい、やらせてください！」という返答。私は初回から作家選出とイベントMC・企画に携わっていますが、ここまでハキハキと意思表示を伝えてきた学生は記憶にありません。あとは、6月11日（日）のトークイベントで大学とは？コンセプトの成り立ちとは？アトリエとは？を紐解き、何故このような作品を制作するに至ったのか？作品は作家の分身である、ということを確認にお伝えするのが私の役目。この「A-LAB Artist Gate」は単なるグループ展ではなく、同じスタートラインに立った作家さんの再構築の場。是非皆さんの目で、希望に満ちた展示をご覧くださいませ。

後藤哲也氏（デザイナー、近畿大学准教授）

A-LABでどのように作品が再構築されるか、そしてどのようなシナジーが生まれるかを楽しみにしています。

中田秀人氏（アニメーション作家、京都精華大学非常勤講師）

今年度のArtist Gate出展作家たちは、これまでは無かった状況下でアートを学び創作してきた。実体の見えない漠然とした不安や、社会で制限された接触や距離というものは、芸術を志す作り手の視点や自己表現に、どのような変化や発見をもたらしたのか。その眼差しはまた新たな繋がりや気づきを見出し、自らの可能性を外の世界に向けて掲げる。道の先に踏み出すべく作品に向き合う7人の若きクリエイターたちが、本展でどのような形でそれぞれの空間を表現するのか注目したい。

原久子氏（大阪電気通信大学教授）

作品の背景にあるコンセプト、表現形態・メディアは異なるが、コロナ禍も含め大きく揺れる時代の波の中で、いずれの作品も今の時代を映す表現だったと感じた。学生時代の集大成である卒業制作は、後の創作活動へ大きな影響を与える場合も少なくないが、いずれ劣らず多様なチャレンジを作品に見出すことが出来た。Artists Gateで紹介できる数は限られている。美術系大学・大学院等の卒業・修了制作展を見て歩いた中で、こぼれ落ちてしまった逸材、候補として最後まで残ったものの物理的に展示が叶わなかった作品もある。専門分野の異なる複数の視点で選出したからこそそのラインナップでもあろう。若い才能の次のステージへの最初の一步の支援となれば嬉しい。

吉川直哉氏（大阪芸術大学教授）

第8回を迎えた「A-LAB Artist Gate」は、審査員からの推薦に加えて公募枠を初めて設けました。若い作家のこれからの応援してステップアップになるプロジェクトとして考えると、今までにも増して選考は難しく議論を重ねましたが、作品や活動についての資料から、この作家がA-LABで展示するとどうなるだろう、という期待を込めた想像を掻き立てられる魅力ある作家が選出されたと思います。学生と社会へ出てからの環境は全く違っているでしょう。その変化を乗り越えて作家活動を継続しようとする姿勢を強く感じました。選考された7名の作家が、このプロジェクトをきっかけとして飛躍されますことを楽しみにしています。